第74次教育研究愛知県集会

特　集

ATU-C
愛知教職員組合連合会
機関紙「愛教組連合」
発　行　所
愛知教職員組合連合会
〒460-0007名古屋市中区
新栄一丁目49番10号
愛知県教育会館内
TEL〈052〉264－1371
FAX〈052〉264－1381
編　集　者
愛教組連合教育担当

第74次教育研究愛知県集会特集

【組合員全員配付】

主催者代表あいさつ

愛知教職員組合連合会　会長
佐藤　勝利

今年は4年に一度のオリンピック・パラリンピックの開催年でありました。今回はフランス・パリの地において盛大に開催され、日本選手をはじめ各国・地域の選手の活躍ぶりが話題となったところです。勝負の世界であるため勝ち負けがはっきり出ますが、その勝負の一瞬の時間にむけて、多くの時間を積み重ねてきたことがよく伝わってきたのではないかと思います。勝負といえば、わたくしたち教員も勝負をしていることがあります。それは、授業です。授業で勝負。これは誰かと競って勝ち負けを表すものではありませんが、オリンピック・パラリンピックの選手たちのように、その勝負の時間、つまり授業にむけて多くの時間を準備にあてています。さらに、一つの授業を終えればその反省を行い、次の授業にむけて準備・改善をすすめていきます。地道に、ひたむきに教材研究を重ね、もっとわかる授業を、もっと楽しい授業を、そんな思いで取り組んでいます。本日は、その一端を本研究集会の各分科会の様子から垣間見ることができるものと確信しております。

「わかる授業・楽しい学校」の実現にむけて、27の分科会会場で実践リポートをもとにした発表や討論が行われます。ぜひさまざまな分科会において、オリンピック・パラリンピックの熱気に負けることのない、先生方の子どもたちを思う気持ちと教育にかける情熱、そして組織的・継続的に行ってきた愛知の教育研究活動の確かさを感じていただけたら幸いです。

本研究集会が、未来を担う子どもたちの健やかな成長をめざして、子どもたちの「ゆたかな学び」を支えるために、すべての大人がいかに協働していくかを、ともに考えていく機会となることを期待します。

あいさつする
参議院議員
斎藤嘉隆様

あいさつする
連合愛知 会長
可知洋二様

基調報告

教育担当
鶴見侑哉

これまでの73次にわたる教育研究において、わたくしたちは夢と希望あふれる教育の創造をめざし、子どもたちを中心にすえ、それぞれの学校・地域の特色を生かした、自主的・主体的な教育研究活動を着実に積み重ねてきました。また、各種調査でいただいた声をもとに、今日的な教育課題を明らかにするとともに、各地域で教育対話集会や講演会などを行い、保護者や地域の方々と意見交換をする中で、子どもたちが自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動できる「生きる力」を育む取り組みについての合意形成をはかってきました。そして、各学校では子どもたちの健やかな成長を願い、日々教育活動に取り組んできました。

さて、次期学習指導要領改訂にむけて、国での議論がすすんでいます。文部科学省の有識者検討会では、「カリキュラム・オーバーロード」が指摘され、教育課程の実施に伴う学校現場の負担の大きさが課題としてあがり、総授業時数については、現在以上に増やさない方向で検討されています。現在「令和の日本型学校教育」という名のもと「すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学び」の実現が求められていますが、教育改革を学校現場主導で行うゆとりがありません。本来、教育改革は学校現場から行われるべきであり、子どもたちに必要な「生きる力」は、ゆとりとふれあいを保障する教育課程の中で育んでいくべきだと考えます。

わたくしたちは、あくまでも学習指導要領を大綱的基準としてとらえ、未来を担うすべての子どもたちのために夢と希望あふれる教育を創造する取り組みを継続し、学校現場からの教育改革を推進していかなければなりません。そのためにも、基礎・基本の確実な定着はもちろんのこと、子どもたち一人ひとりが学ぶ意欲をもち、自らすすんで取り組む、より質の高い学びを大切にしていかなければなりません。また、人・自然・文化などとかかわり合い、地域に根ざした体験活動を中心にした学習を構築し、学校・家庭・地域の連携をよりいっそう強化し、協働して、地域ぐるみの教育を推しすすめていかなければなりません。

本次の教育研究活動においても、ゆとりとふれあいの中で「わかる授業・楽しい学校」の実現をめざし、「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などとのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動をすすめる」の二点を研究推進の重点として提起しました。

わたくしたちがすすめる教育改革は、日々の教育実践を積み重ね、その中で成長していく子どもたちの姿で示すべきであると考えます。各分科会においては、実践研究の報告をもとに、活発な議論を展開するとともに、その成果を各単組・分会に持ち帰り、還流をはかっていただくことを大いに期待します。

分科会概要報告

第1国語教育分科会

文学その他

一、全体を通して

「すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学び」の実現にむけたリポートの発表、その発表をきっかけとした積極的な討論が行われた。各リポートの実践から、討論の柱に沿って追究する課題を焦点化することで、充実した意見交換が行われた。また、「読む活動」という各討論の共通項をもとに、目的や教材、指導の工夫、主体的・対話的な学びのあり方について討論された。

二、討論の内容

〈読む活動を通して、どのような力を身につけさせるのか〉では、ルーブリックを提示し、評価基準を子どもたちと共有した上で、筆者の意図を問う発問から筆者の発想を探り、考えを形成した実践などが報告された。また、初めてふれる古典の学習では、対比的な読みを取り入れながら共感的に読みすすめることで、古典作品に親しみを感じながら登場人物の心情を読み取ることができた実践などが報告された。討論では、主体的な学習を促すための工夫や、系統的な学習となるための読みの観点のあり方について意見交換が行われた。

〈読む力を高めるための教材の活用方法〉では、登場人物の心情の変化を蓄積し、視覚的にとらえることで、自身の読みの深まりを感じることができた実践や、共感的に読みすすめ、さまざまな角度から解釈できる作品を自主教材として開発し、話し合いを通して課題解決をはかった実践などが報告された。討論では、描写に着目させるための教具の工夫や、語彙を増やしていくための支援のあり方について意見交換が行われた。

〈読む力を高めるための指導の工夫について〉では、学習を自己調整しながら、単元を貫く問いの解決をはかる単元内自由進度学習を取り入れた実践が報告された。また、ＩＣＴ機器を活用して考えを可視化させることで、効果的に交流をすすめた実践や、初読の感想をもとに自ら課題を設定し、交流を通して考えを深めていく実践が報告された。討論では、読み深めさせたい課題を設定する上で配慮すべきことや、個別学習をすすめる際の支援のあり方について意見交換が行われた。

〈読む力を高める主体的・対話的な学び方のあり方について〉では、学び合い活動の際、ＩＣＴ機器を活用することで主体的に学習に取り組む姿を引き出すことができた実践や、ペアトークやグループトークを行い、

対話的な学習を通して、考えを広げ深めることをねらった実践が報告された。討論では、協働的な学びを実現するための指導の工夫や言葉に着目して読みすすめていくための教員の声かけや支援について意見交換が行われた。

三、今後に残された課題

(1)　意欲を継続させながら深い学びにつながるような言語活動のあり方について

(2)　表現を根拠とした協働的な学習展開の工夫について

(3)　言葉による見方・考え方を働かせられるような系統的な指導と評価のあり方について

作文その他

一、全体を通して

作文（つづり方）の教育、音声表現の教育、主体的に学ぶ子どもを育てるための指導法についてなど10本のリポートが報告された。子どもたちの実態を見つめ、文字言語・音声言語の特徴を生かして、どのような力を育てていくのかについて討論が展開された。

二、討論の内容

(1)　作文（つづり方）

「自分の思いや考えを言葉で相手に伝えることができるようにするための手だてや方法について（協働的な学習など）」を柱として討論が展開された。実生活と結びつけたり、思考ツールを活用したりして作文を書く実践が報告された。討論では、作文の評価の仕方のポイントや協働的な学びとはそもそもどういうことかを授業実践を交えながら確認した。

また、「自分の思いや考えを豊かに表現できるようにするための手だてについて」を柱として討論が展開された。ＩＣＴ機器や漫画を活用しながらモデル文を提示し、自分の思いを詩や生活作文に表現することをめざした実践が報告された。討論では、評価基準、技法や気持ちを言葉で表すための教員の働きかけ、今後の活用方法について話し合われた。

助言者からは、単元のゴールを示すことの大切さや前向きな推こうの仕方、実生活と作文とのかかわりによる主体性の育み方について助言を得た。また読み手を常に意識し何度も作品を読んでもらうことでよりよい文章ができあがるとの助言を得た。

(2)　主体的に学ぶ子どもを育てるために

「基礎的・基本的な知識・技能を高めるための言語活動を通して、主体的に学ぶ子どもを育てるための手だてや支援の方法について」を柱として討論が展開された。書写の学習をその他の学習や教育活動に位置づけた実践や、できることが増える喜びを実感し、夢中になって表現活動に取り組む子どもの育成をめざした実践が報告された。討論では、子どもたちの気付きから活動を広げることの大切さや既習事項を定着させるための方法について話し合われた。

助言者からは、教科を横断し、継続的に書写指導を行うこと、既習事項を教室に掲示し、自然と目に入るようにすることなどの有効性について助言を得た。

(3)　音声表現の教育

「自分の思いや考えを言葉で相手に伝えることができるようにするための手だてや支援の方法について」を柱として討論が展開された。学びを自己決定しながら話す力を高めることをめざした実践や、自分の考えを整理し、相手にわかりやすく伝えるために思考ツールを活用した実践が報告された。討論では、話す様子を子どもどうしが互いに評価する場面において、話し方以外にも目をむけさせるための手だてや、話すことが苦手な子への支援について話し合われた。

助言者からは、単元の途中にミニテストを行い、どのくらいできているのかを子ども自身が把握すること、実際にやらなければ高まりはみられないため、多くの経験を積ませることが大切であると助言を得た。

三、今後に残された課題

(1)　他者とのかかわりの中で言語を習得させるための支援

(2)　思っていることを素直に表現できるようにするために自尊感情を育てること

(3)　書く力を高めるために、書いたものをより多くの人に評価してもらえる場面の設定

定し、その達成にむけて自分で取り組みを選べるようにすることやＩＣＴ機器などを活用して振り返りをすることが重要であると助言を得た。

(2)　コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む

コミュニケーション力を高めるためには、その基礎・基本となる単語や表現のインプットとアウトプットが重要であることや、場面設定を明確にして英語を使う必然性をもたせることが大切であると確認され、そのための手だてについて意見が交換された。教員とのやりとりの中で学習した単語や表現をインプットしたり、コミュニケーションの型を与えるためにモデリングを行ったりすることの大切さなどもあげられた。

助言者からは、インプットをする際には、単語などの練習だけでなく、言語活動を通して学んでいくことができるようにすることが大切であると助言を得た。

第2 外国語教育 分科会

一、全体を通して

「主体的に学習に取り組む態度を育む指導のあり方」「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」の三つを討論の柱とし、小グループによる発表と討論が行われた。各グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、全体での討論と意見共有が行われた。

小グループでは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を生み出す授業を通して、主体的に追究する子どもの育成をめざした小学校の実践や、授業の導入で帯活動を取り入れ、自分の意見を伝え合おうとする子どもの育成をめざした中学校の実践が報告された。

二、討論の内容

(1)　主体的に学習に取り組む態度を育む

子どもの「やりたい」という意欲を高める導入や教材の工夫、振り返り活動の充実について討論が展開された。ポートフォリオやＩＣＴ機器を活用した動画で振り返りをしたり、身近な題材や相手意識がもてる場面を設定したりすることで、より意欲的に取り組めるなど、参加者から多くの意見が出された。

助言者からは、自己調整力を高めることが大切であり、子ども自身が目標を設

第3 社会科教育分科会

小学校

一、全体を通して

本年度は、県内19本のリポートが報告され、歴史・公民学習、国土・産業学習、地域学習の分野ごとに討論を行った。各分野の討論では、それぞれの実践にもとづいて活発に意見が交流され、これからの社会を形成していく子どもを育てるために、熱心な議論が行われた。それぞれの分野で地域教材を開発し、ゲストティーチャーによって学びを深める実践や、思考ツールやICT機器を有効に活用しながら課題を追究する実践などが報告され、それらの有効性が確認された。

総括討論では、「現在求められている社会科学習における教員の役割」と「子どもを中心にすえた社会科学習とは何か」について、活発な議論が行われた。

二、討論の内容

(1) 歴史・公民学習

「先人の働きや政治の役割を、切実感をもって追究できる学習活動の工夫と育てたい力」について話し合われた。ゲストティーチャーや身近な人の思いにふれながら追究し、現状をリアルにつかませていくことが切実感につながることが確認された。一方で、歴史はリアルではみられないため、問いや課題との出会わせ方を工夫することで、子どもが疑問をもち、学びたいという思いを高めていくことが切実感につながるという意見も出された。助言者からは、各単組でゲストティーチャーのリストをつくり、共有するしくみを整えるとよいとの助言を得た。

(2) 国土・産業学習

「よりよい社会実現をめざしながら、対話的な学習活動をすすめるにあたって、どのような課題設定をするべきか」について話し合われた。子どもたちの家庭環境や生活経験が違う中で、同じ話し合いの土台にのせるために共通認識をもたせたり、焦点化させたりすることの重要性が確認された。また、多面的・多角的な見方を広げるために、社会構造や時代背景を意識させた対話や立場を明確にしての対話などの有効性も確認された。助言者からは、ゲストティーチャーと対話する際に、教えてもらうという関係性ではなく、ときにはともに考えるという対等な関係での対話も重要であるとの助言を得た。

(3) 地域学習

「地域素材を教材化する時の留意点とは何か」について話し合われた。さまざまな立場の人が住んでいることを意識させ、地域の様子を多面的・多角的にとらえていくことの重要性が確認された。その上で、自分自身も社会の一員であるという自覚をもたせていくことが、主体的に社会参画することにつながっていくだろうという意見が出された。また、自分たちで課題を見つけ、力を合わせて解決していく経験が将来的に社会に参画する力になってくるという意見が出され、助言者からも社会に対して意思表明していくことが重要であるという助言を得た。

三、今後に残された課題

(1) 子どもを中心にすえた学びの展開方法と教員の役割

(2) 社会科における個別最適な学びと協働的な学びのあり方

(3) 主体的な社会参画意識をどのように育てていくか

中学校

一、全体を通して

昨今の目まぐるしく変化する世界の情勢を鑑み、子どもたちにとって本当に必要な力とは何か、またそのためには何が必要なのか考え続けることの重要度が増してきている。県内16本のリポート報告をもとに本年度もテーマを四本柱とし、地理・歴史・公民のそれぞれの分野でどのような実践を行うべきなのか積極的な議論が展開された。その中には身近な地域の事象を通して課題や疑問を見つけ、よりよい社会づくりにむけて子どもたちが主体的に取り組み社会認識を深める実践などが多くみられ、社会科教育を通してどのような子どもたちを育てたいのか、そのための教員の役割は何かについて、話し合われた。

二、討論の内容

(1) 子どもたちが主体的に取り組む学習活動のあり方

子どもたちの社会に対する認識とのズレを利用した課題設定や地域素材の活用などにより、学びを自分事としてとらえさせる工夫が意見交換された。また振り返り活動によって自身の考えの変化を感じとらせたり、問いを生かして授業を展開したりすることで主体的な学習活動を続けさせられることが確認された。そして、主体的に学んだ結果、社会科の目標に迫ることが重要であることが再確認された。

(2) 見方・考え方を働かせる対話的な学びのあり方

対話的な学びが充実するためには、答えを一つに絞らない課題を設定し、多面的・多角的な見方を働かせて参加させることの重要性などが話し合われた。そのために根拠となる知識を習得するための時間を確保することや、見方・考え方を働かせられるようになるための長期的な指導計画の必要性が確認された。

(3) 主権者として社会参画の意欲を高める学習活動のあり方

社会参画という言葉の定義が確認され、そのための能力や資質をいかに育むかが話し合われた。地域素材を活用したり、社会事象とのつながりを実感させたりすることで社会が抱える課題について考える経験を積ませやすくなるだろうという意見が出された。その学習活動を通して社会への認識を深めていくことが子どもたちの社会参画への自信にもつながるであろうと討論が展開された。

(3) 思考力・判断力・表現力を育む

表現力を高めるために、目的に合った場面を設定することや相手意識をもたせること、実際にALTなどとやりとりをする機会を設けることなど、具体的な手だてがあげられた。

助言者からは、「英語を話したい」と思える安心感や「伝えたい」と思えるような課題を提示することが大切であり、子どもたちに教え込む指導ではなく、学び取る指導を行っていくことが大切であるとの助言を得た。

(4) 全体討論

小グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、子どもの意欲を引き出す授業展開や、各学校で取り組まれている言語活動について、それぞれの実践をもとに活発な議論がされた。

三、今後に残された課題

(1) ICT機器を活用した言語活動の充実

(2) 小学校と中学校との連携

(4)　地域素材から社会に対する見方・考え方をどう働かせるか

地域素材を扱うことのメリットとして、自分事としてとらえさせやすいこと、第一次資料との物理的な距離の短さ、郷土愛の醸成などがあげられた。デメリットとしては、扱った地域への社会認識しか深まらない危険性、歴史学習においては資料の少なさなどがあげられた。そのため教員は地域素材を教材化することでどのような子どもを育てたいのか明確にし、地域素材で得られた認識を汎用性のある一般化された社会認識にするための手だてを講じる必要性が確認された。

第4 数学教育分科会

算数

一、全体を通して

「主体的な学び」「対話的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」の三つの柱立てで、実践の報告が行われた。

実生活に即した教材の活用や一斉授業と自由進度学習を効果的に取り入れて子どもたちの主体性を育む実践、聴き合うことに焦点を当てた活動や、考えを表現する方法の工夫を行うことで子どもが考えを深めることをめざす実践、多様な考え方のよさに着目した話し合い活動や、子どもの考えを対話する中で統合・発展する工夫によって子どもが数学的な見方・考え方を働かせながら取り組む実践などが報告された。

二、討論の内容

(1)　主体的な学び

討論では、日常生活の中から問題をつくる中での問題への評価や子どもへのフィードバックの仕方、既習事項の確認と子どもの自由な発想のバランスを保つための工夫などについて話し合われた。

助言者からは、身近な問題場面を設定して現実的課題をもたせ、子どもの思考に合わせたアプローチを考えることや、自分の活動の振り返りを次の授業に生かしていくことの必要性について助言を得た。

(2)　対話的な学び

小グループの組み方や聴き合うことに焦点を当てた実践、考えを表現する方法の工夫をして学び合うよさを味わわせる実践などが報告された。

討論では、対話のねらいや場の設定の仕方、聴き合いの目的、対話が苦手な子への支援などについて話し合われた。

助言者からは、聴き合いを通した双方の理解の確認や自分の考えの妥当性について意見交流することの重要性や、グループ学習を取り入れる時に話し合う要点を明確化していくための発問の工夫について助言を得た。

(3)　思考力・判断力・表現力の育成

筋道を立てて考え、多様な考え方のよさに着目した話し合い活動や、子どもたちの考えを対話する中で統合・発展する工夫によって子どもが数学的な見方・考え方を働かせる実践や、タブレット端末を用いて子どもの思考を可視化させる実践などが報告された。

討論では、活用問題について子どもの実態に合わせての設定や子どもが自分の考えを深めるために、教員がどのようなタイミングでどのように支援するとよいかについて話し合われた。

助言者からは、子どもたちのさまざまな考えを検証して、根拠のある考えに自分たちで練り上げるための工夫や統合と発展をして考えを深めていく中で特殊化や条件の確認の必要性についての助言を得た。

三、今後に残された課題

(1)　子どもの実態に合わせて、現実的な場面の問題解決と数学的探究のどちらがよいのかを見極めること

(2)　パフォーマンス課題や活用問題に関する評価と自由進度学習における個別の支援と評価の仕方の整備

(3)　子ども主体の授業実践をどのように常態化させるか

数学

一、全体を通して

「主体的な学び」「対話的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」の三つの柱立てで、実践の報告や討論が行われた。数学的活動を通して意欲的に取り組むことができる単元構成を考えた実践をはじめ、ＩＣＴ機器を活用した実践や対話を重視した実践など、多岐にわたる実践が報告された。

二、討論の内容

(1)　主体的な学び

日常の事象と数学の事象の関連付けを、単元を通して行うことで、学びを生かす態度を育てる実践や、自分の力でねばり強く考える力を身につけるために、過程や姿勢を評価した実践、単元末リポート「数学世界地図」によってまとまりやつながりを意識させた実践が報告された。

討論では、日常の事象の数値における誤差の取り扱いや、日常の事象と数学の事象の違いのとらえ方、子どもへの興味・関心のもたせ方などについて話し合われた。

助言者からは、日常の事象の場面設定のたいへんさとその有効性、ＩＣＴ機器を文房具と同じような感覚で使える環境整備や教員側の意識の変革、日常の事象の数値などに必要感をもたせる発問、思考ツールの適切な使い方が重要であるとの助言を得た。

(2)　対話的な学び

計算技能の定着のために、解法を見通し、ペア学習で自分の考えを伝え合う実践や、主体的に学び合うために、思考ツールを使って視点を明確にしたり、考えを整理したりする実践、自他の考えや理解を深めるために、段階的に対話を行う「聴き合い」活動を行った実践などが報告された。

討論では、話し合いの場面についての評価の方法や、子どもが自らどのように思考ツールを選ぶのかなどについて話し合われた。

助言者からは、話し合いが苦手な子どもにはＩＣＴ機器を活用して支援すること、単に対話するだけでは深い学びにはつながらないこと、対話は子どもたちどうしのみならず自己や問題との対話もあること、操作・実験可能なアプリケーションを活用することでより確実な概念の理解が可能になるとの助言を得た。

(3)　思考力・判断力・表現力の育成

よりよく問題を解決させるために、数学のよさを見出す機会を設けた実践や、算数と数学との系統性を意

第5 理科教育分科会

小学校

一、全体を通して

子どもたちにとって身の周りにある事象や意外性のある事象を教材として提示して彼らの興味・関心を引き出したり、ＩＣＴ機器などの教具の利用を工夫することで彼ら自身の考えにゆさぶりをかけたりしながら、子どもたちが主体的に学習課題を追究できる工夫を凝らした実践リポートが、小学校中学年で7本、高学年で7本報告された。

二、討論の内容

報告の区分毎での討論や、全体を総括した討論においては、特に、次の二観点に重点が置かれ、教材取り扱いの具体や指導の工夫事項の紹介が話題にあがった。

(1) 子どもたちが学びに向き合うための目的に見合った教材の工夫

中学年の実践リポートでは、磁石を用いた迷路というゲーム性のある教材を学習の中心に置き、徐々に難易度が上がる中で、迷路をクリアしたいという気持ちをもちながら追究に取り組む実践や、時間帯が変化することで作戦が変化する、オリジナルの影ふみゲームから太陽の動きに気付く実践が紹介された。高学年の実践リポートでは、てこの原理を利用したおもちゃを修理しようという目的意識をもち、両端に吊り下げる鳥のおもちゃの重さを意図的に変えることで、自然に学習が深まっていく実践が紹介された。討論では、ふりこの単元で長さの異なるブランコの揺れる様子を紹介したり、同じくふりこの単元でペットボトルの中身を隠し、揺れる様子から中身を推測したりするなど、さまざまなアイデアが出された。

(2) 発達段階や領域に応じた理科の見方・考え方を働かせるための授業デザイン

中学年の実践リポートでは、自分の力だけで考察を行うことが難しい子どものためにキーワードを用意し、思考の支援を行うことでより活発な意見交流ができる実践が紹介された。高学年のリポートでは、フローチャート式のカードを活用し、予想や考察を支援する実践や、子どもがより主体的に追究を行うことができるよう、自由進度学習を取り入れて行った実践、さらにメタ認知を促すために振り返りシートを工夫した実践が紹介された。討論では、特に自由進度学習についての意見交換が活発に行われ、子どもの学びの方向を誘導するために教員による個別の声かけが有効であること、ＩＣＴ機器を用いて友だちと意見交流することで自分の考えが広がったり深まったりして、それが追究の深まりに効果的であることが再確認された。

(3) 助言者から

助言者からは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実をはかることで探究的な深い学びが得られるが、そのためには子どもが自ら学びたいと思える魅力的な教材と出会わせることが重要であると助言を得た。また、子どもが主体的に追究を行う際には、学び方を習得させることが重要であり、そのためには発達段階を教員が十分に理解する必要があると助言を得た。さらに、理科を学ぶ中で有用性を実感させることや、子どもが学習したが重要だと認識していないことに対してていねいに指導していくことが重要であると学んだ。最後に「なぜ、理科を学ぶのか」と考えることにより、理科の授業で大事にしていくことが見えてくる。それが、理科の教科観や本質、特質につながることを学んだ。

三、今後に残された課題

(1) 数学的活動においてよりよく探究するためのＩＣＴ機器の活用の模索

(2) 限られた時間の中での、焦点を絞ったカリキュラム・マネジメント

(3) 学校を越えたコミュニティーの活用

中学校

一、全体を通して

身近な事物・現象を教材にすることで子どもの興味・関心を引き出す実践、子どもが繰り返し課題を見つけ問題を解決する実践、他者との対話を通して考えを深める実践など、中学校一年生のリポート6本、二年生のリポート6本、三年生のリポート5本の計17本が報告された。なお、分野・領域別では第一分野が11本（物理6、化学5）、第二分野が6本（生物3、地学3）であった。

討論では、柱に設定された六観点のうち、「学びに向き合うための目的に見合った教材の工夫」「考えを広げ、深めるための対話的活動の工夫」「探究の重要性」を取り上げた意見交換が活発に行われた。

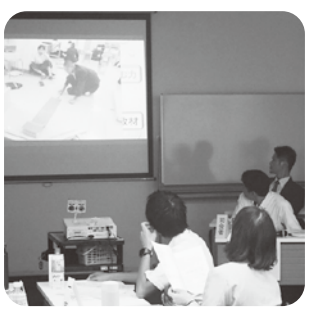
二、討論の内容

(1) 学びに向き合うための目的に見合った教材の工夫

理科の教材では、実物を目にしたり、実生活に即したものを取り上げたりすることが大切だという意見が出された。提案では、電気ヒーターのロータリースイッチによる回路のしくみを考えさせる実践、体育で実施したスナッグゴルフでのショットにおける子どもの困り感を解決させる実践例などが紹介された。また、実物を目にすることが難しい分野では、ＩＣＴ機器を用いて映像で見せたり、モデルを示すことで実物に代わるものを見せたりする実践例などが紹介された。

(2) 考えを広げ、深めるための対話的活動の工夫

討論では、学び合いの工夫について意見交換された。話し合い活動はタイミングが重要で、子どもたちが話したいと思う場面で行うことが大切だという意見が出された。また、場面に応じて、「隣どうし」「四人グルー



三、今後に残された課題

(1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実をはかる手だて

(2) 子どもが自ら追究を行うために、検証可能な問題に出会わせる授業デザイン

(3) 問題解決に必要な探究技法の習得

(4) 理科を学ぶ意義、理科の本質、特質

プ」「学級全体」と人数を変えることの重要性や、言語活動だけでなくイラストや図による視覚的な表現方法の工夫についても話し合われた。提案では、言語化して表現することが苦手な子どもへの対応として、ＩＣＴ機器でのプレゼンテーションの併用による活動例が紹介された。

(3)　探究の重要性

探究の過程をたどることの大切さについて、討論が展開された。自ら考え実践することの繰り返しが、これからの社会で必要となる問題解決能力を育成するという意見が出された。また、探究させる工夫として、イメージマップやＯＰＰシートを活用した見通し・振り返りの実践例などが紹介された。

(4)　助言者から

理科の考え方は、一年生で「問題を見出し、見通しをもつ」、二年生で「解決する方法を立案し、仮説通りかを分析して解釈する」、三年生で「探究の過程を振り返り、次の実践につなげる」ことを子どもが自らできることが重要である。理科の見方は、想定される視点群から子どもが自ら自然事象に合わせて選択して導入し、見通しや振り返りに役立てることが重要であり、仮説検証型の授業でこれらの働きが深まることが大切だと学んだ。また、科学的な見方や考え方を培うために、学習を日常につなげることの重要性についても助言を得た。

三、今後に残された課題

(1)　興味を引きつけ、自発的かつ検証的な学びを促す、各領域での教材の工夫

(2)　探究における活動時間を確保できる授業計画や、学習実態の評価の方法

(3)　理科の見方・考え方を働かせた見通しが位置づけられた、授業展開の工夫

第6　生活科教育分科会

一、全体を通して

おもちゃづくり、昔遊びや栽培活動など多岐にわたる報告が行われた。どの実践も子どもの思いや願いを高め、「やってみたい」という思いを持続させていくための手だてが多く紹介された。

討論では、スタートカリキュラムを実践していく中で、保育園・幼稚園との交流の重要性について、三年生の理科・社会にむけてどのように手だてを講じて、円滑につなげていけばよいのかについても意見交換が行われた。

二、討論の内容

(1)　スタートカリキュラムについて

「ひと・こと・もの」の出会いやかかわりを大切にすること、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとにしたスタートカリキュラムの計画と実施をすることにより、学校が安心でき、楽しい場所になっていく子どもの変容がみられた。幼保小連携の大切さが確認された。

(2)　栽培活動について

成長させることができた喜びや達成感から、自信をもたせることができ、最後まで育てることのできた自分のよさに気付く姿があった。その気付きのために、子どもが愛着をもって育てるためのさまざまな工夫について確認された。

(3)　飼育活動について

他者とのかかわりを通して、生物への思いや願いを深め、生き物を大切にしていこうとする子どもの育成についての実践が報告された。飼育で必ず出てくる困難や疑問を一人ではなく、他者と協働して解決させていくことで、生き物に対する思いを強めるだけでなく、身近な人々に自ら働きかける姿が増えたことが明らかになった。

(4)　おもちゃづくりについて

子どもの思いや願いを実現できるような場の設定や他者とのかかわりを大切にすることで、自他のよさに気付かせる実践が報告された。他学年との交流において、新たな気付きを得て、活動に対する意欲が高まったり、自分の作品のよさを確認したりすることができると確認された。

(5)　昔遊びについて

友だちや上級生、地域の方との交流を大切にし、ねばり強く取り組むための手だてが報告された。子どもの意欲を高めるため、思いや願いをもたせるために単元のはじめにおける教材への出会わせ方に工夫を講じることの大切さを再確認した。

(6)　水で遊ぼうについて

子どもの思いや願いをもとに活動がすすめられていく単元構想で、人とかかわることで自分の思いの実現や自分の成長を感じることをめざした実践が報告された。思いや願いを子どもどうしで確認したり、ワークシートに可視化したりすることで、最後まで子どもの意欲を持続させていくことができたと確認された。

(7)　統括討論

「スタートカリキュラムから三年生の学習まで、つなぐためのカリキュラムマネジメント」というテーマで話し合われた。スタートカリキュラム作成においては、入学前に交流できると小学校生活が始まる際に生かすことができるのではないかという意見が多数出された。三年生への移行については、理科や社会では、生活科の中で学習したことや体験したことを生かして学んでほしいという願いから、生活科での幅広い活動の実践の大切さが確認された。

助言者からは、三年生とのつながりにおいては、生活科での試行錯誤、気付きの質を高めることで理科での予想や資料からの気付きなど理科・社会における素地を培っていくことができるのではないかと助言を得た。

三、今後に残された課題

(1)　活動の中で子どもに試行錯誤させ、気付きの質を高めるための授業のあり方について

(2)　単元の内容におけるゲストティーチャーとの連携の取り方について

第7　美術教育分科会

一、全体を通して

「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」と、「コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践」の二つのテーマに沿った実践報告と質疑応答の後、「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに、総括討論が展開された。ともに、子どもの姿や思い、教員の願いなどをもとにしてたいへん活発な質疑応答や討論が行われた。

二、討論の内容

(1)　子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫

子どもがふるさとに愛着をもち、主体的に色や形を工夫できるようにするために、校区の製茶工場に協力を仰いでお茶を試飲し、地域の魅力とあわせてパッケージをデザインする実践

や、子どもが自分を見つめ、「楽しさ」を実感しながら表現することができるようにするために、箱を舞台にして想像を広げ、材料や表現方法を考えて自由な世界をつくる実践などが報告された。

7本の実践報告をもとに、題材の導入で鑑賞する作品や資料の選び方、テーマや表し方の決め方、地域とのかかわり方などについて活発な質疑応答が展開された。

(2) コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践

子どもが「やってみたい」という思いをもって、新しい形や色をつくり出す喜びを味わうことができるようにするために、育てた野菜やさまざまな材料を使ってスタンプ遊びを楽しみ、ファッションショーで友だちや保護者と見合う実践や、子どもが自ら生きて働く知識を習得することができるようにするために、SDGsのかるたやすごろくから想像を広げ、何を、どこで、誰と、どのように表すのかを自分で決めながら絵に表す実践などが報告された。

8本の実践報告をもとに、交流でのICT機器の活用方法や、自由進度学習における個に応じた支援の方法、学年をまたいだ鑑賞のあり方など、活発な質疑応答が展開された。

(3) 総括討論

総括討論では、近くの発表者どうしや全体での話し合いを通して、周りの目や評価を気にしたり、リアリティを追究したりすることで、発想を広げられなかったり表現活動への苦手意識を抱いてしまったりする子どもが少なくないことが確認された。そのため美術教育では、「やりたい」という意欲や「すごい」と感じる感性、自分でやってみる経験や、考えて答えを見つける課題解決能力、発見したり表現したりしたときの感動などを大切にすべきであることが確認された。最後に、「図工美術は取り組みが大切」「自分の『楽しい』や『好き』を見つけよう」など、子どもや教員自身の目標になるようなキャッチフレーズを考えて意見交換した。

助言者からは、ライフスタイルに合わせた「提案力の時」と呼ばれる現在、「感性」と「論理」が必要であり、だからこそ「STEAM教育」のように美術の力が求められている。対象や事象を「観る」活動と、表現を「客観視」する活動を大切にしてほしいという助言を得た。また、自由な発想や豊かな感性、こだわりをもって個性を探究する力が求められている中で、仮に中間鑑賞や交流が画一化へむかっている場合には注意が必要である。人生をたくましく、しなやかに生きるために、「アートを楽しむ」実践を重ねてほしいという助言を得た。

第8 音楽教育分科会

一、全体を通して

音楽教育分科会では、学習活動における子どもたちの変容をわかりやすくするために、動画を取り入れた発表形式ですすめられた。子どもたちに「音楽を形づくっている要素」を知覚・感受させ、音楽的な見方・考え方を働かせながら活動に取り組む実践が多く報告された。音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽に対する自分の思いや意図をもち、子どもたちどうしがかかわり合う中で変容していく様子が印象的であった。討論の中では、子どもたちが「自分もやってみたい」「もっと上手になりたい」と興味をもち、主体的に活動するために、曲との出会わせ方や振り返りの工夫を凝らすことを大切にしたいということの話し合いが行われた。

二、討論の内容

(1) 子どもたちが協働的に音楽表現を追究できる効果的な手だて

互いに聴き合ったり、意見を交流したりすることで、音楽表現を追究することができることが話し合われた。互いに生の演奏を聴く場面が必要であるが、ICT機器の録音機能を活用し意見を交流することで、子ども自身ができていると思っていても、改めて課題を見つけることができるという報告がされた。子どもどうしで活発な意見交流を行うためには、音楽を形づくっている要素を明確にし、話し合う視点を与えることが大切であると話し合われた。

協働的に取り組むとは、自立した状態で、一つのものをつくり上げていくことが必要であり、取り扱う音楽に対して子どもたち一人ひとりが自分の意見をもって活動をすることが大切であるとの助言を得た。

(2) 主体的な学習活動の中での教員の指導・支援のあり方

子どもたちが親近感をもつことができるような題材を用意したり、「おもしろそう」というきっかけをつくったりすることは、子どもたち一人ひとりが学習意欲を高め、目的意識をもつために大切であると話し合われた。また、子どもたちが困ったときに、その解決方法が示された動画を集めたリンク集が貼られた「お助けシート」を準備することが有効であるという報告がされた。さらに、主体的に取り組むことができるように、活発に話し合ったり、子どもの気付きを全体に広め価値付けたりすることが重要であると確認された。

三、今後に残された課題

(1) 音楽づくり・創作活動の評価方法について

(2) 主体的・協働的な学びの中で、自分の思いや意図を実現するための技能指導のあり方

第9 技術教育分科会

一、全体を通して

「A材料と加工の技術」「B生物育成の技術」「Cエネルギー変換の技術」「D情報の技術」の四つの柱立てと、同市町での共同研究実践の報告や討論が行われた。技術科の目標とめざす資質・能力の実現にむけて、計10本のリポートが報告された。

総括討論では、「学校、地域の特色を生かした授業展開や課題」「社会の発展に伴う技術教育としての今後の展開」などについて話し合われた。

二、討論の内容

(1) 材料と加工の技術

異なる作品を複数回製作することで学びの連続性が生まれ、技能の向上と子どもの主体性を引き出すことができた実践や、割り箸を用いた丈夫な構造物づくりコンテストを手だてとした技術の見方・考え方を育成する実践が報告された。また、さまざまな接合方法を体験させ、個別最適な学びから協働的な学びへとつなげるための実践が報告された。

討論では、融合教材を、例として内容AとD、内容BとDなどで考えていくことの必要性や、３ＤＣＡＤを視野に入れた実践研究を推進することの必要性や、レーダーチャートで評価させる場合には条件設定が大切であることが確認された。

(2)　生物育成の技術

地域の特色と農家の抱える課題から、地域と協働して伝統栽培を学ぶことで、地域への愛着・関心を高めることができた実践が報告された。

討論では、地域産業への理解を深める活動の有用性と、常に開発者の立場に立って考えを創造していくことの必要性が確認された。

(3)　エネルギー変換の技術

ニーズに合わせたエレベータ製作を題材とすることで、生産者や消費者の立場、技術の４側面などを多面的・多角的に考えさせた実践が報告された。

討論では、主体的に取り組む態度の評価基準を明確にした、工夫したワークシートの紹介が出された。

(4)　情報の技術

身の回りで活用できるセンサを使ったプログラム開発や、対象者を絞り商品化をめざしたゲーム開発の実践、ＡＩ技術の評価などを盛り込んだ授業が報告された。

討論では、個人に能力差があるプログラミング学習における、デバック場面での問い返しの重要性が再確認された。また、ターゲット層をイメージさせることでさらに子どもの興味・関心を引き出したいと意見交換された。

(5)　パフォーマンス課題の有効性

各題材において貫いた学習課題を設定し、ルーブリックを明確にしながら学びを生活に生かそうとする子どもの育成をめざした実践が報告された。

討論では、子どもと共有した評価規準の練り上げと、さらなる有効性の検証が確認された。

(6)　総括討論

「学校、地域の特色を生かした授業展開や課題」については、地域のコミュニティーや人材バンク、キャリアナビゲーターを候補に入れてゲストティーチャーを選定したいという意見が出された。「社会の発展に伴う技術教育としての今後の展開」については、ニーズを知るために子ども・保護者にアンケートを取って教材設定に生かす取り組みや、Ｓｏｃｉｅｔｙ５.０社会での知識・技能の習得を見据え、技術科教員としての見聞を広めることが重要だという意見交換がされた。

助言者からは、常に発展する技術産業とシステムがもたらす未来を、教育という立場で子どもたちに考えさせていくことが大切であるという助言を得た。

第10 家庭科教育分科会

一、全体を通して

子どもたちが相互のかかわりの中で考えを伝え合い、主体的に取り組む工夫がされた実践が報告された。

総括討論では、限られた時間数の中で授業に取り組むために、「地域のボランティアと協力する」「調理器具を使いやすいサイズにする」などの意見が交わされた。また、持続可能な社会の実現にむけて「ＳＤＧｓへの理解を深める支援を行う」「学校や地域の特性と合わせて、生活に生かす」などの意見が交わされた。他にも、ＩＣＴ機器を活用した授業実践として「授業の様子を動画で撮影し、危険な場面を次時で共有する」などの意見が交わされた。

二、討論の内容

(1)　子どもたちに学びを自分事としてとらえさせるための実践

自立した消費者を育成するために、消費者としての批判的思考を高める実践では、導入でＴＶＣＭを紹介したり、塾の広告から商品を選んだりするなど、身近な題材を取り上げ、消費生活を自分事として考えられる取り組みが報告された。衣生活では、「家族トーク」やコーディネートをする場面を設定し、課題を身近に感じられる取り組みが報告された。

(2)　意欲を保って授業に取り組み続ける工夫がなされた実践

食生活では、思考ツールの活用や食材のゆで時間の比較実験などを通して意欲的に家庭実践を行う取り組みが報告された。住生活では、汚れの可視化や汚れに合う洗剤を考え、掃除をしたいという思いを継続させる工夫がみられる実践が報告された。

(3)　家庭との連携を取り入れた実践

食生活では、家族のために献立を考え、調理実習を行い、家庭での調理の意欲を高める報告がされた。また、みそ汁の実践ではワークシートを使って家庭とやりとりをしたり、家庭での調理の様子を学んでから調理実習をしたりすることで、スムーズに実習に取り組むことができた報告がされた。

助言者からは、①自分で問題を解決する力をつけるために、課題との出会わせ方、向き合わせ方、解決方法を関連させたストーリー性を大切にするとよい。②「自立した学習者」になるために、時間数が少ない家庭科でこそＩＣＴ機器を活用し自学自習ができるような工夫をするとよい。③思考ツールは子どもの思考に寄り添い、目的に応じて使い分けるとよい。④家庭科教育の中で変わらないものがある。同時に今日的な内容にもふれる必要がある。その両方を意識して授業をすすめるとよいとの助言を得た。また、授業で活用しやすい教材・教具や、今日的な課題を扱った授業実践が紹介された。

三、今後に残された課題

(1)　子どもたちが学びを自分事としてとらえ、意欲を保って授業に取り組み続けるための工夫

(2)　持続可能な社会の実現にむけて、社会問題についても考えさせるための視点の与え方

(3)　家庭との連携を取り入れた実践

第11 保健体育分科会

体育

一、全体を通して

「体育でどのような子どもを育てるか、自ら考え、行動する子どもをどう育てるか」を大テーマに追究した授業実践が発表された。教材・教具の選定やかかわり合いの方法など、主体的に体育学習に取り組むためのさまざまな工夫のある授業実践が報告された。

二、討論の内容

教材について、どのような視点で開発をしているか、ねばり強く学習に取り組むための授業づくりの工夫について活発な意見交換が行われた。

(1) わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり

体育の学びを充実させるための学習活動における、教材や教具の工夫やルール設定の工夫についての意見や実践に対する質問が出された。

討論では、運動を苦手としている子どもに対して、自分で課題をもつための方法や「わかる・できる」を実感できる授業づくりの考え方について意見が出された。その中で、ＩＣＴ機器の活用の仕方については、授業のどの場面で、どう扱うことが有効であると考えられるか確認された。

助言者からは、まず、体育学習の中で子どもたちが、①「何が」わかることが大切なのか、②「何が」できることが大切なのか、③「何と」かかわることが大切なのかを考えることが必要であるとの助言を得た。そして、そのために、どのように学習改善と指導改善をはかっていくかを考えていく必要があるとの助言も得た。

(2) ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり

子ども自身が、どう学習していくかわかること、どのような変化があったか自分でわかることが、ねばり強く学んでいくことにつながるのではないかという意見が出された。

討論では、教材の開発について、子どもの心理的安全性を保つという視点や生涯スポーツの視点など、どのような視点で開発を行っているか意見交換された。また、ねばり強く学ぶことをめざした指導の方法について、個人種目をグループで学ぶことや「やってみたい」と思える場や選択の場面をつくることなどの工夫について話し合われた。

助言者からは、「ねばり強く学ぶこと」になる適切な課題をどのように設定するのかが重要であるとの助言を得た。また、「ねばり強く学ぶこと」には、どのような「知識及び技能（運動）」との関連があり、どのような教材を設定するのかを考えることが大切であるとの助言も得た。

三、今後に残された課題

(1) 「わかる・できる・かかわる」を深める学習内容の明確化と適切な評価情報の充実

(2) 「ねばり強く学ぶこと」の具体的な学習状況の把握と課題・教材の設定と配列

保健

一、全体を通して

「子どもが生活の主体となるための保健教育」をテーマに、さまざまな健康課題に対応するため、教材・教具を工夫した実践、体験を通して自分事としてとらえることのできる授業実践、計画的・継続的に集団及び個別にアプローチした実践などが報告された。報告を通して、子どもたちの健康に対する意識の高まりや、健康課題の解決にむけた実践力が着実に育っている様子を感じることができた。

二、討論の内容

(1) 指導方法・指導形態の工夫

担任と連携して情報モラル教育に取り組んだ実践や、根拠にもとづいた指導に加え、子ども発案の企画を生かし楽しみながらメディア使用時間の軽減をめざした実践、学校歯科医との連携や染め出しで視覚的に変化をとらえさせた実践、心の健康とメディア使用を関連させた実践が報告された。

討論では、子どもが主体的に学ぶための手だてについて話し合われた。自分と事例を比較したり、ＩＣＴ機器を活用して視覚化したりすることで自分事としてとらえさせることや、前向きな気持ちで取り組むための仕掛けを工夫することが有効であるとの意見が出された。

助言者からは、メディア使用のルールを決める場合は家庭と協力し実態に合ったものにすること、集団指導と個別指導を組み合わせて、楽しく学び、気持ちの変化を行動化へと導く工夫が必要であるとの助言を得た。

(2) 心・命・性に関すること

異学年交流と個別指導でコミュニケーションスキルの向上をめざした実践や市内小中学校が共同で研究した「生と性のカリキュラム」に取り組んだ実践などが報告された。

討論では、校内の連携・協力体制づくりについて話し合われた。管理職や担任・保健主事を巻き込んで健康教育を行う必要性や、ＩＣＴ機器を活用した教材を作成し担任が取り組みやすくする手だてについて意見が出された。

助言者からは、取り組みを年間計画に位置づけることや、取り組みの成果をフィードバックすることと、日々積み重ねることが重要であるとの助言を得た。

(3) 生活に生きる保健教育

けがや熱中症について得た知識をもとに、適切な予防行動ができる子どもの育成や、子どもが自分の健康課題を解決し、習慣化をはかることをめざした実践が報告された。

討論では、日常生活における行動化を促す手だて及び家庭との連携について話し合われた。課題を自分事としてとらえたり、行動を定着させたりする工夫や、保護者が一緒に取り組める生活点検カードの活用、継続した働きかけと積み重ねが大切であるなどの意見が出された。

助言者からは、できたことを維持するために子どもの楽しみになるように繰り返すこと、取り組み後すぐに子どもの様子を家庭に伝えることで家庭の協力を得られるとの助言を得た。

(4) 保健・総合などでの指導のすすめ方

担任やＳＣと連携し、計画的に保健の授業と他教科を関連付け、単元を通して生きる力を育むために取り組んだ実践が報告された。

討論では、実践に対する評価方法について話し合われた。ＩＣＴ機器の活用やアンケート項目の工夫、記述からキーワードを拾うこと、また他者評価を得る必要性など、具体的な意見が出された。

助言者からは、実践後の評価は、客観性をもち、質的・量的の両面からていねいに分析するとよいとの助言を得た。

第12分科会 自治的諸活動と生活指導

小学校

一、全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」を主題にして、活発に討論された。

友だちとのかかわりを通して他者理解を深める実践や、子どもたちがよりよい人間関係を築くために、認め合い活動や異学年交流を通して活動した実践が多く報告された。また、子どもたちが自分自身を見つめ、自ら課題を見つけて取り組むことで、達成感や満足感を味わい、豊かな人間性を身につけた実践などが報告された。

これらの実践報告をもとに、子どもたちの活動のあり方や意義、子どもたちの実態のとらえ方、それらをふまえた教員の支援のあり方について熱心な討論が展開された。

二、討論の内容

(1) どのようにして、集団の質を高めていくのか

実態を把握するための取り組みや話し合い活動を充実させた実践、自分がめざしたい目標や学級目標にむかって、主体的に活動できる子どもを育てた実践が多く報告された。

討論では、質の高い集団をつくるために、学級で理想の姿を共有する機会や、自信がもてない子どものために子どもどうしのつながりをもたせる支援が必要であると話し合われた。安心感が得られるようにすることが大切とも確認された。

(2) 子どもの気持ちを大切にし、実態を把握した上で、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか

学校生活における認め合い活動や居場所づくりなどを通して、温かい人間関係をつくり上げていった実践が多く報告された。

討論では、よりよい人間関係を築くためには、子どもたちが共通する具体的な目標にむかって取り組むことが重要であると話し合われた。また、人間関係を広げていくために、学校生活のさまざまな場面で互いを認め合う機会を与えることが必要であるといった意見などが交換された。さらに、取り組みを継続して行っていくことが大切であるとも確認された。

(3) 心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか

アンケート調査を用いた分析や振り返り活動などを通し、個や学級に適した自他理解を深める実践や、子どもどうしがかかわる具体的な実践が報告された。

討論では、発達段階に応じた認め合い活動に継続的に取り組むことの大切さについて話し合われた。その中で、教員が毎日子どもとのかかわりを振り返り、一人ひとりの子どもを価値づけていくことや、子どもどうしで他者理解を深めていくことの重要性が確認された。

総括討論では、たくましく生きる子どもを育てるための活発な討論が展開された。教科学習の中で集団の質を高めるために、まず一人ひとりが自分事としてとらえ、自分の考えを伝え合える場を効果的に設定することが大切と確認された。また、子どもどうしが理解し合うために、一人ひとりに寄り添った支援が重要であると確認された。

三、今後に残された課題

(1) 子どもが自ら課題を見つけ、解決の方法を見出していく力を育むための指導・支援のすすめ方

(2) 日常生活における行動化を定着させるための校内及び家庭との連携の工夫

中学校

一、全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」を主題にして、活発に討論が展開された。

子どもたちが多様な他者とかかわりながら、自己指導能力の向上をめざす実践や、自分自身や学級の様子を振り返り、そこから明らかになった課題を主体的に解決することをめざす実践、生徒会が中心となって、学校全体で主体的・協働的に課題解決をめざす実践が報告された。これらの実践報告をもとに、子どもたちの活動のあり方や意義、子どもたちの実態のとらえ方、それらをふまえた教員の支援のあり方について討論が深められた。

二、討論の内容

(1) 子どもの気持ちを大切にし、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わせるための支援のあり方

討論では、各種活動をどのように子どもたち主体ですすめていくかについて意見交換された。行事の運営については、多くの子どもに活躍してほしいという教員の思いが、子どもにとっては強制力を感じてしまう可能性もあると意見が出された。生徒会発信で全校生徒に声をかけたり、自己肯定感を高め、安心して挑戦できる環境を整えたりすることの重要性が確認された。また、レーダーチャートやアンケートから課題を見出すだけではなく、長所も明らかにし、子どもたち一人ひとり、または学級の長所をのばすことも大切であると話し合われた。さらに、集団の質を高める活動については、振り返りや活動時の様子から一人ひとりの実態を把握し、個別に支援することが必要であると意見交換された。

(2) 問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方

討論では、SNSトラブルの未然防止やネットモラル教育のためには、情報通信技術支援員などと連携することが有効であると話し合われた。また、長期欠席者の社会的自立をめざすために、保護者や教員どうしが連携をはかり、個に応じた支援をしていくことが大切であると確認された。

総括討論では、「たくましく生きる」とは、どんな生き方かについて討論が展開された。ねばり強さや前にすすむ力はもちろん大切であるが、耐えるだけでなく、受け流すことができたり、「NO」と言えたりする力も、生きていく上では大切な力になると意見交換された。

助言者からは、「なぜ」「今何が必要なのか」など、子どもたちが常に問いをもって過ごすことで、さまざまなことが自分事となり、主体的に考えていけるようになるとの助言を得た。また、子どもたちに「こうあるべき」と思わせず、「自分らしくていい」と思えるような環境を、子どもたちと考えていくことが大切であるとの助言を得た。

第13 能力・発達・学習と評価 分科会

一、全体を通して

個々の気付きから課題を設定したり、学び方を自分で決めたりすることで主体的に学ぶことのできる子どもの育成をめざした実践や、伝え合い方、伝え合う相手を工夫した対話による協働的な学習を通して、ともに高め合い、学び続ける子どもの育成をめざした実践などが報告された。

また、ＩＣＴ機器を活用した実践も多く報告された。ＩＣＴ機器で単元ごとのポートフォリオを作成することで、自己の課題に対して主体的に学び続ける子どもの育成をめざしたり、情報共有アプリを使用した対話活動で、子どもたちの協働的な学びを支えたりするなどの実践が報告された。教材研究においても教員間で情報共有アプリを使用し、協働的に教材研究を行うことで、授業改善をめざしていくという取り組みも報告された。子どもだけでなく、教員自身も変化し続ける社会に取り残されないように学び続ける姿勢を見せていくことの大切さが確認された。

さらに、ゼロカーボンシティの実現にむけて、ＳＤＧｓを自分事としてとらえることのできる子どもの育成をめざした実践や、地域の公園の再整備事業を教材として、社会への参画意識を高める実践なども報告された。子どもの実態に即した教材の工夫や、単元設定をすることで、主体的に学び続ける子どもの育成をめざした実践が報告された。

二、討論の内容

(1) 子どもの主体性を育てる取り組み

主体性を育てる取り組みについての討論では、子どもが追究したくなるような身近な課題や必要感のある課題を設定することや、学習が苦手な子どもにとって安心感を与えられるような環境づくりが必要であるという意見が出された。討論の中で、子どもの実態に応じて、単元で身につけさせたいことさえ教員がつかんでいれば、教材はどう変わってもよいはずであるという意見も出された。

助言者からは、「一時間の授業で終わることなく、他の学びの場面で既習事項が生かされたり、家庭での生活に生かされていることに気付いたりすることで、より主体的に学び続けることができる」との助言を得た。

(2) 指導と評価の一体化をはかるためには

討論では、アンケートや学習カードの振り返りを通して、子どもの学びの状況をしっかりと把握することや、単元で得てほしい力を教員から子どもに明示することが必要であるという意見が出された。一人ひとりの特性や実態を適切に見取り、有効な手だてを考えていくという特別支援教育からも学ぶことが多くあることも確認された。また、評価を子どもに伝えることでフィードバックすれば、子ども自身の自己評価とのずれを解消したり、次の活動への意欲づけをしたりすることができるという意見も出された。

三、今後に残された課題

(1) ＩＣＴ機器を、適切に効果的な場面で活用していくこと

(2) 主体性を育むための個に応じた学習をすすめていくと同時に、単元、授業の中で、身につけさせるべきことを確実に身につけさせられるようにしていくこと

第14 特別支援教育 分科会

一、全体を通して

「ゆたかに生きるための力を育む」というテーマのもと、16本のリポートが報告された。

人とかかわる力やコミュニケーション能力を高めるための実践や個々のニーズや特性を把握し、学習意欲を高めるために教材・教具を工夫した実践、特性による個のつまずきや苦手さを克服するための自立活動の実践、全校で取り組む特別支援教育の実践などが報告された。

二、討論の内容

(1) 人とかかわる力を育てるための指導

人とかかわる力を高めるために、意図的にペアをつくったり、友だちや教員と一緒に課題を解決するような場を設定したりして学習をすすめていく実践が報告された。また、仲間とよりよい関係を築くための手だてやルールを学んだり、気持ちを表す言葉を丁寧に学ぶようにしたりした実践も報告された。討論では、気持ちの理解や自分の感情を表現する力をのばすための工夫について意見が交わされた。イラストや写真を工夫して使用して学ばせることや、音声や声色、言葉遣いの違いでの感情の違いも学ばせること、日常の生活の中でその都度指導をし、振り返ってロールプレイをすることなどの工夫が発表された。そのほか、通常学級との交流及び共同学習のすすめ方や、通常学級の教員や友だちなど周りへの理解の促し方についても意見交換がされた。

(2) 学習指導をどうすすめるか

音楽や理科、総合的な学習での指導による実践が報告された。音楽では、実際に楽器にふれたり、楽器の構造を詳しく調べたりして関心を高める工夫や、感受したことを言葉で表現するための工夫が紹介された。その他の教科では、子どもが自ら興味をもって学習に取り組みたくなるような単元の設定を工夫したり、体験的な教材を開発して指導をすすめたりする実践が報告された。討論では、理科、

社会、生活科など、学年によって異なる内容を指導する際にどのような工夫をしているか議論された。単元を見比べ、結びつけ、個々の目標を設定して計画を立ててすすめているという工夫が紹介された。また、主体的な学習に結びつく単元の紹介もされた。

(3) 特別支援教育をどのようにすすめるか

正しく発音をして伝える力を高める指導や、「見る力」を高める指導など、認知の偏りにアプローチをし、苦手を克服するための自立活動の実践が報告された。その他、ユニバーサルデザインを意識した環境・授業づくりに学校全体で取り組んだ実践が報告された。討論では、自立活動において、苦手の克服、得意をのばすこと、バランスをどのようにとるべきか意見交換がされた。その他、素早くアセスメントを行い、実態を見取るための方法についてさまざまな意見が出された。また、特別支援教育を学校で推進する立場として、どのように特別支援教育について職場の教職員に理解してもらうとよいかが議論された。

三、今後に残された課題

(1) キャリア教育の視点を取り入れ、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方

(2) ＩＣＴ機器を効果的に活用した実践

(3) 子どもたちが主体的に学びにむかうことができる実践

第15 進路指導・キャリア教育分科会

一、全体を通して

基礎的・汎用的能力を育むために、体験活動や教科指導、学級活動等を通して望ましい職業観や人生観を育むキャリア教育の実践や、ＥＳＤを柱としたキャリア教育を通して自己の生き方を見つめる実践が報告された。また、キャリアパスポートを、学校の実態に応じた形式で作成し、充実させることで、校種間や各学年で系統的・継続的な教育になるように取り組んだ実践が報告された。討論では、キャリア教育のとらえ方として、「職業教育」ではなく、「生き方指導」としてとらえ、自己の人生の見つめさせ方について話し合われた。

二、討論の内容

(1) 啓発的な活動や体験に対して、子どもたちの意欲を引き出し、系統的・継続的に取り組ませるための手だてについて

ゲストティーチャーによる授業を通して、子どもたちの意欲を引き出す実践が報告された。また、学校行事の事前学習として、外部のキャリア教育プログラムを活用することで、子どもの意欲をより引き出すことができ、成果があがることが確認された。

(2) 自己を見つめ、望ましい職業観・人生観を培うための、学校と地域の連携について

地域の方に出前授業を依頼し、地場産業や文化について学んだり、職場体験学習において地域の事業所で仕事を体験したりすることで、勤労観や職業観を育む実践が報告された。地域の特色に応じた学校と地域の連携の重要性が確認された。

(3) 先を見て「生き抜く力」を培う、明確な目標をもったキャリア教育の計画について

各学年のＥＳＤカレンダーを作成し、教科横断的に一年間の見通しをもって教育活動にあたる報告がされた。また、ＥＳＤすごろくという掲示物をつくることで、子どもたちにも一年間の見通しをもたせた実践が報告された。教員だけでなく、子どもたちと一体となって取り組むことでキャリア教育の成果をあげていく必要性が確認された。

(4) 各教科や総合的な学習を通して、学校全体で共通理解し、四つの基礎的・汎用的能力を育成できるキャリア教育の体制について

校内現職教育での研修や教科横断的な取り組みにおいて、四つの基礎的・汎用的能力のどれをいつ培うかを年間計画において明示する実践が報告がされた。キャリア教育の目標である四つの基礎的・汎用的能力を、学校全体で共通理解のもとで取り組む必要性が確認された。

(5) 学びのまとめ、振り返りの実感、学年間の結びつけについて

キャリアパスポートの活用方法について報告された。学習の前後でめあてや振り返りをまとめるだけでなく、子どもたちがいつでも見直すことができるよう保管場所の工夫を行ったり、今までの運用実態を精査して全学年で統一のものにしたりするなど、キャリアパスポートの活用の工夫の仕方について確認された。

三、今後に残された課題

(1) キャリア教育の実践が系統的・継続的なものになる計画的な指導

(2) 学校・保護者・地域の連携によるキャリア教育

(3) 子どもたちにいかにキャリア教育の四つの基礎的・汎用的能力を意識させるか

(4) 一人一台端末の活用による学びの振り返りや引き継ぎ

第16 教育条件整備分科会

一、全体を通して

子どもたちの豊かな学びを支えるための人的・物的支援について、教員の業務改善のためのアプリ開発、一人一台端末の整備状況と教育条件整備、不登校児童生徒への支援についての実践が報告された。討論では、教員の多忙化解消のためのアプリ開発による効果や、コーディネーターの必要性について意見交換がされた。また、一人一台端末による学校内外での豊かな学びのあり方について議論された。さらに、不登校児童生徒を支援するための外部機関との連携について話し合いがされた。

二、討論の内容

(1) 教員の笑顔を増やすアプリ開発を通して

教員の長時間労働の要因は長年変わらないことから、それを解消するためにアプリの開発が行われた。子どもたちの一人一台端末の持ち帰り状況の管理や住所から通学団を調べ、管理するアプリなどが報告された。討論では、開発されたアプリをどのように広げていくか、また今後の運用の展望について意見交換がされた。

助言者からは、アプリを通して子どもたちの様子を保護者にも公開することのメリットや、アプリ開発ができる教員どうしのネット

ワークの充実、アプリ開発をはじめとした業務改善専任コーディネーターの人員配置が必要であるとの助言を得た。

(2)　子どもたちが意欲的に学ぶことのできる学校をめざして

ＩＣＴ機器の整備状況や一人一台端末の使用状況、端末の持ち帰りの現状が報告された。授業でのＩＣＴ機器の使用割合が高い一方、一人一台端末を持ち帰る学校の割合が低いことも報告された。討論では、各地区でのＩＣＴ機器を使った授業実践についての意見交換や、一人一台端末の持ち帰りに伴うデジタル教科書の重要性も報告された。

助言者からは、個別最適な学びのために一人一台端末を家庭でも正しく使うことは必須であること、小学校低学年のうちからタブレット学習にふれ、メディアリテラシーを培うことの重要性に加え、高速大容量の通信ネットワークの構築やタブレット及び充電ケーブル等の破損に対応する予備機、消耗品の配備等、維持管理にかかる予算確保が必要であるとの助言を得た。

(3)　不登校児童生徒の支援について

全国で増加傾向にある不登校児童生徒を支援する新たな校内教育支援センター「エールーム」や生活サポート主任、スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）の活動状況について報告された。討論では、不登校児童生徒に対しての進路指導や、各自治体でのサポート体制について意見交換がされた。

助言者からは、生活サポート支援非常勤講師やＳＳＷの配置拡大や待遇改善をすることで子どもたちに対してよりきめ細かな対応ができると助言を得た。

三、今後に残された課題

(1)　教員の多忙化解消のために、職場から困り感や要望を吸い上げ、さまざまなニーズにあったアプリの開発やそれを紹介するコーディネーターを配置すること

(2)　ＧＩＧＡスクール構想から年月が経ち、破損したタブレットの代替機や消耗した周辺機器の整備費の拡充、一人一台端末を家庭でも有効に使うためのノウハウを情宣すること

(3)　生活サポート支援非常勤講師及びＳＳＷの増員や、校内教育支援センターの拡充と地域間格差の解消、不登校児童生徒に専属でかかわることのできる人員を配置拡大することをつけるために、教員の力量向上をめざした実践も報告された。これらの報告をもとに討論が行われた。

第17分科会　過密・過疎、へき地の教育

一、全体を通して

実践報告を行ったいずれの学校も、小規模校・へき地校であることの利点や課題をふまえ、学校や地域の実態に応じた教育活動を行っていた。そして、各学校において、特色ある教育活動を展開するために、地域と学校が諸課題を抱えるなか、子どもたちに身につけさせたい力を明確にし、地域の課題を見つめることができるよう工夫をこらした実践が報告された。また、子どもたちが社会で生き抜く力

二、討論の内容

(1)　子どもに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性を生かした教育支援のあり方

小規模校において教育活動を展開する利点や課題について討論が展開された。小規模校の特性を生かした柔軟なカリキュラムの編成により、「個別最適な学び」や体験活動を充実させていくことについて意見交換がされた。一方、子どもとの距離感が近いことから、教員の手が入りやすくなることで、子どもたちの主体性が失われる可能性が懸念された。

助言者からは、子どもたちの主体的な行動を促し、将来を見通したカリキュラムを編成して、社会で生き抜く力をつけられるような教育活動を展開する重要性について助言を得た。

(2)　過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方

学校と地域が連携しながら実施する教育活動について討論が展開された。参加者からは、地域の「ひと」だけでなく、「もの」や「こと」を教育活動に組み込んで展開することで、地域の「ひと」の温かさにふれ、地域への愛着をもつ子どもたちを育てていくことが大切であると話し合われた。

助言者からは、地域教材を展開する中で、地域コーディネーターなどと連携したり、地域における課題を自分事としてとらえさせたりする教育活動を展開することが重要であると助言を得た。

(3)　人口の減少、経済の衰退、学校の統廃合など、諸課題を抱える中での地域と学校のあり方

学校統廃合による地域との関係性について討論が展開された。参加者からは、今後、さらに過疎化がすすんでいく中で、地域の思いを汲み取りながら地域のよさを生かしつつも、働き方改革など学校をとりまく環境の変化に合わせた教育活動の推進が必要であると話し合われた。

助言者からは、統廃合によって学校と地域の関係が希薄になる懸念があることから、小中学校九年間を見通した学校づくりの必要性を説かれ、その中で人間関係を形成し、ふるさとを大切にする心を醸成していくことが重要であると助言を得た。

三、今後に残された課題

(1)　子どもに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性を生かした教育支援のあり方

(2)　過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方

(3)　人口の減少、経済の衰退、学校の統廃合など、諸課題を抱える中での地域と学校のあり方

第18分科会　情報化社会の教育

一、全体を通して

ＧＩＧＡスクール構想により、一人一台端末が導入されたことで、それらを活用した実践が多く報告された。特に個別最適な学びや協働的な学びにおいて、ＩＣＴ機器等がどのように利活用され、どのような効果があったのかという授業実践が多く報告された。また、ＩＣＴ機器の基本的な操作技能や思考ツールを活用して情報を整理して伝える実践や、プログラミング的思考を育成する実践も報告された。また、インターネットとの付き合い方を振り返って主体的にルールづくりをめざす実践や、多角的な視点からインターネット依存について考える実践など、情報モラルの育成にかかわる実践も発表された。

二、討論の内容

(1)　「個別最適な学び」と

「協働的な学び」の一体的な充実をはかるために、どのようにＩＣＴ機器を活用していけばよいか

子どもたちが学んだことを整理したり、学んだことを発表し友だちや地域の人たちと共有したりするために、思考ツールや協働学習支援ソフトを活用した授業実践や、プログラミング的思考を生かしながら仲間とともに課題を解決する実践が報告された。

討論では、それぞれの利用ソフトの長所や短所、デジタルとアナログの使い分けにおいて意識していることについての意見交換が行われた。

助言者からは、子どもたちの疑問から単元課題を設定する際のＩＣＴ機器の活用方法や、個々の考えを共有し、深めることで多面的・多角的に考える力が身につき、子どもたちの将来につながっていくとの助言を得た。

(2)　子どもたちとメディアとのかかわりについてどのような学習活動をすすめていけばよいか

自分とメディアとのかかわりについて振り返り、主体的にルールづくりを行う実践や、メディアの利用と健康状態を分析することで、節度ある使用を考えていく実践が報告された。

討論では、主体的にルールを決めるときに際してどのような手だてを講じると効果的なのかという点や、情報モラルと道徳で行う視点と特別活動で行う視点について討論がなされた。

助言者からは、子どもたちの周りにあるメディアは日々進歩しており、教員も時代の変化についていくこととともに、情報モラルという視点だけではなくデジタルシティズンシップの育成という視点も必要であるとの助言を得た。

(3)　情報の共有や収集において、どのようにＩＣＴ機器を活用していけばよいか

自分に合った方法で情報を収集するためにジグソー法やＩＣＴ機器を使った授業実践や、表計算ソフトやプレゼンテーションソフトなどのアプリケーションソフトを使った複線型授業の実践、ＱＮＫＳ思考法と体験活動を組み合わせながら子どもたちが主体的に追究していく授業の実践が報告された。

討論では、実践で報告されたジグソー法やアプリケーションソフトなどのさまざまな手だてが他教科に応用できるのか、または他の教員でも活用できるかという視点での討論がなされた。

助言者からは、子どもたちが自ら疑問をもって、情報を収集・整理し、さらにその情報の信ぴょう性や客観性を確かめていく行動が大切であるとの助言を得た。

第19 読書・学校図書館 分科会

一、全体を通して

さまざまな学習活動を支援する学校図書館の機能の充実をはかった実践が報告され、各校の取り組みや自治体ごとの学校図書館ネットワークについて情報交換がなされた。「情報センター」の機能においては、インターネットと図書の調べ学習の利点を考えさせる実践や、情報を吟味し正しく活用していけるよう手だてを加えた実践が報告され、討論が展開された。また学校司書や学校図書館、市立図書館と連携をはかりながら、よりよい読書環境の構築をめざす実践が報告され、「読書センター」機能の充実へむけた手だてについて討論が行われた。教科の学習に図書を活用した実践が報告され、市立図書館や学校図書館との連携の現状について活発な意見交換が行われた。

二、討論の内容

(1)　情報活用

図書やインターネットから情報を集め、説明文の批判的読みをする実践や、調べ学習の手順やポイントをパターン化・チャート化して可視化することで、自分で調べ学習をすすめられるように工夫した実践が報告された。討論では、情報化社会の中で子どもたちが情報を取捨選択したり、整理したりする力を育てていくための手だてについて話し合われた。

(2)　図書館経営・連携

学校図書館に興味をもってかかわれるよう、利用しやすい環境づくりに関する実践や、読み聞かせ活動の充実をはかる実践が報告された。討論では、読み聞かせの指導の内容や、読み聞かせを通じて多くの人とかかわることの意義について討論が展開された。

(3)　読書活動

子どもが多くの分類の本に興味をもてるよう、クラウド型授業支援アプリを活用して読書記録を行う実践や、ショートショート（短い物語）づくりを通じてたくさんの本にふれながら読書に親しむことで、語彙や文章表現を豊かにしようと取り組んだ実践が報告された。討論では、自分の読書傾向を知った子どもの変容、文章の読み取りや表現の苦手な子どもへの支援について話し合われた。

(4)　図書の活用

グループ内で各自が役割をもち、それぞれ異なった視点で読みを行った実践や、低学年の保健学習の場面で図書を活用した実践、小説の背景をとらえるために図書資料やインターネットを活用して情報収集した実践、学校図書館の蔵書の整理と市立図書館学校配本を活用して学習内容に関する図書資料を集めた実践が報告された。学校図書館の「学習センター」としての機能を充実させるにあたり、学習に必要な図書の充実の現状や取り組みについて情報交換が行われた。

(5)　情報交換

家庭や地域に開かれた学校図書館づくりのための「図書館ボランティア」の活動内容について情報交換がされた。子どもへの読み聞かせや本の修繕、館内の掲示物作成など多岐にわたる活動をボランティアの方から協力を得ている事例が紹介された。

また、信ぴょう性の低い情報を扱うことの危険性や情報の信ぴょう性を判断できるようにするための手だてについて、情報交換がされた。

三、今後に残された課題

(1)　学校図書館ネットワークを活用しながら、子どもたちの自主的・自発的な学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解が深められたりするような「学習センター」としての機能を充実させていくこと

(2)　地域社会と連携した魅力的な学校図書館づくりのために学校司書や図書館ボランティアとの連携をすすめていくこと

第20 総合学習 分科会

一、全体を通して

身近な事象を探究課題として取り上げ、他者とかかわり合いながら、主体的に取り組む子どもの育成をめざした実践が多く報告された。

どの実践も各地域の特性を生かした内容で単元が構想されており、子どもの興味・関心を引き出しながら、子どもたちの思考に沿った実践が報告された。

二、討論の内容

(1) 総合学習を行う上で難しいと感じること

限られた時間数で子どもの思考に沿いながら授業を展開していくことが難しいという意見や、各学校で総合学習のカリキュラムが決まっており、毎年同じテーマになってしまうが、子どもにとってそれでよいのかという意見が出された。

助言者からは、限られた時間数で子どもの思考に沿った授業を行っていくためには、教員のやりたいことや学ばせたいことを、子どものやりたいことへとつなげていくような単元構想が大切であるとの助言を得た。また、毎年同じテーマだとしても、子どもの現状に合わせて切り口を変えることで、その年の子どもの実態に合った新鮮な授業にしていくことができるという助言を得た。

(2) 効果的に地域教材を使用するために、どんなことを意識するか

地域教材の価値をより高め、子どもが主体的に探究していくために教員が意識するべきことについて討論が行われた。地域の困り感や課題がつまっている教材を見つけることが大切で、地域の人たちと話したり、活動をともに行ったりする中で、そのような魅力的な教材を見つけていくことができるという意見や、地域に対してどのように発信していくかというような活動の締めくくりに対する見通しをもつことが大切だという意見が出された。

助言者からは、子どもに新しい気付きや疑問を与えてくれる人やものが魅力的な地域教材であり、子どもが何に困り、何を解決したいと思っているかを的確につかんでいくことが教員の大切な役割であるとの助言を得た。

(3) 総括討論

子どもの主体性を失わずに、持続可能な実践にするために必要なことについて話し合われた。教員が変わっても実践ができるような、学校としての系統性をもたせることや、地域の人や企業と協力し、教員と地域が一緒になって授業を行っていくことの大切さについての意見が交わされた。

助言者からは、実社会・実生活に深くかかわる活動に取り組むことが、子どもの主体性を育むことにつながるとの助言や、時間的な制約や物理的な制約の中で子どもたちにできることを考えさせることも大切であり、この制約に抗うことなく実践を行っていくことが持続可能な実践につながっていくとの助言を得た。

三、今後に残された課題

(1) 子どもの実態に合わせたカリキュラムの見直し方

(2) 地域との連携の仕方

特「特別の教科 道徳」分科会

一、全体を通して

小中合わせた15本のリポートでは、子どもの発達段階や実態をふまえた道徳の授業を通して、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことができるよう、さまざまな手だてをもとにした実践が報告された。討論は、「実践におけるさまざまな工夫が子どもたちの自己の生き方・人間としての生き方を深めることにつながるものとなっているか」に重点をおいて展開され、活発な意見交換が行われた。

二、討論の内容

(1) 小学校の実践について

【さまざまな思考ツールの活用による考えの可視化】

道徳の授業で、多様な考えを視覚的に表現するために、ＩＣＴ機器を活用してポジショニングやジャムボードなどを用いたり、スケールや心情メーターなどの思考ツールを取り入れたりすることで、発達段階や子どもたちの実態に応じた支援を行い、全員が参加することができる授業実践が報告され、手だての有効性について話し合いが行われた。

【学びを根付かせるために】

子どもたちが、道徳の授業で学んだことを、自分自身で振り返ることが重要であるという議論が活発に行われた。そのための工夫として、めざす学びの姿を記した「学びのものさし」を提示したり、ポートフォリオで学びを蓄積したりする方法以外にも、総合やキャリア教育、ミニ道徳など授業以外のところで、横断的な学びを日常生活に根付かせていくことが必要であるという話し合いが行われた。

(2) 中学校の実践について

【個別と協働】

多面的・多角的な考えをもつことができるようにするために、授業時に仲間の考えを共有する活動を取り入れた実践や、主体的に道徳性を養うことができるようにするために、学びの方法を選択させたり、教員が適切に介入したりする活動を取り入れた実践などが報告された。その後、「協働的な学び」の実現にむけた、グループ編成の仕方や人数、形式などについて活発に話し合いが行われた。

【授業の形態】

道徳的諸価値の理解をもとに、よりよい生き方について考えるために、他の教育活動と関連させながら行う「パッケージ型小単元」を取り入れた実践や、人権教育の根幹である自己理解と他者理解をベースに、互いのよさや違いを認め合う学習活動を取り入れた実践などが報告された。その後、教科横断的な道徳や学年ローテーション授業、板書や思考ツール、ＩＣＴ機器を活用した授業などについて、さまざまな授業形態のよさや課題について意見交換された。

三、今後に残された課題

(1) 道徳と他教科の学習を結びつけ、関連を充実させる手だてについて

(2) 思考ツールとして、ＩＣＴ機器の活用に終始するのではなく、教員と子どもが対話をして考えを深めていくためのツールとしての活用方法について